黒人研究の会会報

Japan Black Studies Association Newsletter No.81 (March 30, 2016)

第81号　２０１６年３月３０日

例会発表要旨

１０月例会　２０１５年１０月２４日　キャンパスプラザ京都

① 文学の映画化に伴う問題――『ハンガーゲーム１，２』『１２イヤーズ・ア・スレイブ』『死ぬことを考えた黒い女たちのために』を中心に

赤尾　千波

最近映画化された英米文学について、拙著『アメリカ映画に見る黒人ステレオタイプ』(2015)では、黒人キャラクターに注目して論じたが、今回の発表はこれに新たな考察を加えた。

ジュニア向け SF 小説『ハンガーゲーム』(2008)の著者は、近未来は人類の混血化が進んでいるはずと考え、登場人物の人種的背景をわざと曖昧に表現しているが、映画(2012)では、人種が特定できる外見の俳優（金髪碧眼、アフロヘアなど）を起用し、人種を可視化した。『2』(2013)でもその傾向は続いており、これは先鋭的な原作を旧態依然とした「ハリウッド流の無難な人種表象」にもどしてしまった例と言える。

スレイブナラティブ『12 イヤーズ…』(1853)の映画版『それでも夜は明ける』(2013)は、ナレーションがなく、ナラティブの持ち味をどう再現するかが見どころである。再現フィルム仕立てで客観的に表現する手法が功を奏し、映画化に成功した例と言える。

黒人女性作家ヌトザケ・シャンゲの舞踏詩『死ぬことを…』(1975 年初演)の映画版『フォー・カラード・ガールズ』(2010)について、拙著では、タンジー/ナイラ姉妹が「性的に放逸な混血（ムラトー）女性」のステレオタイプに当てはまると分析した。本発表はこれに加え、原作の台詞はそのまま映画でも独白の台詞になっているので一見、正確に映画化されているかに見えるが、実はまったく違う文脈で語られていることを指摘した。『フォー・カラード…』は、『死ぬことを…』の映画版とは言えず、“based on “より“inspired by”と表記するのが適当な「別物」であると結論づけた。

② エメット・ティルの遺産——60 年追悼記念行事におけるアフリカ系アメリカ人の集合的記憶

坂下　史子

本報告では、2015 年 8 月にシカゴで開催されたエメット・ティル事件 60 年追悼記念行事を概観し、その意義を考察した。1955 年にミシシッピ州で起きたこの有名な事件は、近年の人種暴力事件においても頻繁に言及され、ティルは今なお人種暴力の犠牲者の象徴として記憶されている。本行事は母親の名を冠した遺族団体 Mamie Till-Mobley Memorial Foundation が主催し、ティルが埋葬された墓地での追悼集会や、基調講演を伴う晩餐会、“YOUth EmPOWERment Day” と題されたシンポジウム、葬儀が行われた教会での追悼礼拝が 3 日間にわたり行われた。

上記プログラムはそれぞれ、人種暴力をめぐるアフリカ系アメリカ人の集合的記憶が形成される場となっていたが、その特徴は以下の二点に集約できる。第一に、過去と現在の犠牲者遺族の間で多様な犠牲者への追悼が行われた。行事には近年の犠牲者の遺族が多数招待されたが、Trayvon Martin や Michael Brown、Sandra Bland といった「有名」な犠牲者の遺族だけでなく、比較的「無名」な犠牲者遺族も参加していた。また、メディアで注目される警察暴力の犠牲者のみならず、黒人同士の犯罪やその他の原因による犠牲者の遺族も参加しており、多様な人種暴力の形態を包括的に捉えようとする試みが確認できた。第二に、本行事では、人種暴力に対する闘争を継続するために世代を超えた共闘の取り組みが行われた。特にシンポジウムでは、ティル事件やその記憶化に直接関わった当事者たちが登壇者として当時の体験を共有しただけでなく、現在のさまざまな抗議運動に関わる若い世代の活動家も議論に参加し、今後の運動のあり方が模索された。報告ではこうした記憶化の意義だけでなく課題も確認した。

③ ASALH 参加報告

加藤　恒彦

はじめに

2015 年 9 月 23 日（水）から 27 日（日）にかけてジョージア州アトランタのシェラトン・ホテルを本部に ASALH(the Association for the Study of Afro-American Life and History)の百周年記念年次大会が開かれ、JBSA から加藤、西本、坂下、源の 4 名が参加した。

ASALH は 1915 年 9 月 9 日、黒人の歴史家 Carter G. Woodson によって創立された黒人史学会である。

ASALH に参加することになった経過

本年 4 月中旬、ASALH の The Journal of African American History の編集長 V.P. Franklin 氏より、ASALH の創立 100 周年記念大会に「黒人研究の会」の代表と会員を招待したいという趣旨のメールがあり、役員会で協議の上、私が前代表として参加し、レセプションで挨拶させてもらうことになった。また、西本副代表、坂下事務局長が海外からの参加者向けのセッションで日本における黒人研究や個人としての黒人研究へのかかわりについて発表することになった。また、ミシガン州立大に留学中の源氏も個人研究発表を行うことになった。

ASALH の大会に JBSA への招待が来た経過について Franklin 氏とのメールのやりとりのなかで以下のことが分った。

At the recent meeting in Los Angeles of the National Council of Black Studies (NCBS), I attended the session where Prof. Asante spoke very highly of the JBSA and his visit to Japan. That presentation inspired me to extend the invitation to you and your members.

大会のセッション

会員数からして黒人研とは比べ物にならない規模であるので、様々な session が早朝 8 時半から夜遅くまで、並行して進行し、発表者数は全体で千人を超える数に上る。

私が挨拶をすることになっていたレセプションは夜の 9 時に始まり 10 時半ごろまで続いた。各テーブルに分かれ、ブュッフェ形式での食事を挟んでのものであり、参加者は 200 人弱であった。

私の 15 分ほどのスピーチでは以下のことを簡潔に述べた。第一に、ASALH ができた 20 世紀初頭に日本でも黒人研究が始まった事。すなわち、アメリカの日系移民への差別と、その背景としての 19 世紀末以来の“Yellow Peril”があり、さらに、南部における黒人に対する segregation system がその根源であることを日本の学者やジャーナリストが知ったことである。

第二に、日本の主流の黒人研究は日露戦争以来の日本の中国・アジアへの帝国主義的進出戦略に賛同するか、あるいは良心的な研究であってもその戦略に利用されたこと、第三に、しかし、日本には片山宣のような、日本の侵略主義を批判し、アメリカの黒人の解放の為にアメリカやソビエトで活躍した社会主義的国際主義者の伝統があったこと、第四に、日本のアメリカ文学研究者の中には左翼的、自由主義的立場から奴隷貿易や奴隷制度、そして、奴隷制廃止運動を研究した高垣松雄氏のような人々もあったこと、第五に、戦後「黒人研究の会」を創設した貫名正美氏は戦前の日本における黒人研究の先駆者として 1930 年代の初頭に「英語研究」に連続して発表された高垣氏の論文を挙げておられ、戦後神戸外大で発表された論文は奴隷制廃止論者のギャリソンについてのものであり、明らかにそこに継承関係があること、を述べたものである。

反響はとても良かった、と思う。日本に行っても黒人は殆どいないのに何故日本で黒人研究が存在するのか、と思っていた、そんなことがあったのか、知らなかったという反応があった。バス・ツアーの折にカナダの国会議員の黒人の女性から話しかけられたときには、その話をしたのだが、驚いておられた。

1月例会　2016年1月30日　青山学院大学青山キャンパス

① James H. Cone の黒人の解放の神学にみるニグロスピリチュアルとブルース

山本　愛

James H. Cone は、1967 年に既に黒人奴隷は白人の主人たちに教えられた歪曲されたキリスト教ではなく、独自の「神観」を持ち得たと、著作にて主張している。それは、彼らがアフリカ的な道産、キリストの福音、そして奴隷経験という真実の三つの事からつくり上げた、弱きもの、抑圧されたものへの神の弛みない愛の深さと平等であった。その事をすぐに歌にした。言葉にした。そして溢れんばかりの神への賛美としてアフリカ的なリズムに乗せて、アフリカ的な魂にのせて秘密の教会で一晩中踊り歌った。それがニグロスピリチュアルであり、その後に生活の日々の喜び悲しみ、葛藤、自由への希求を具体的な物語の中で歌ったもの、それがブルースである。つまりブルースは世俗霊歌であって、スピリチュアルとその本質を分けるものではないと、Cone は主張する。アメリカにおける黒人の奴隷経験は、彼らに真実の神の姿を確信させただけでなく、芸術的な反逆という崇高な表現をも引き出したのである。そして、西欧から来たキリスト教の聖なるものと俗なるものを分けるという概念には染まらずに、俗なるものも聖なるものの一つであると悟ったのである。つまり神は人間の全体を愛する存在であり、その確信が奴隷たちの自己肯定感やアイデンティティーへの源泉になったのである。それは、スピリチュアルとブルースという二つの偉大な音楽的、芸術的な表現によって可能ならしめたのだと。

② オバマ氏の失望、オーガスト・ウィルソンの絶望

伊勢村　定雄

オーガスト・ウィルソン(August Wilson)が最後の作品である『レイディオ・ゴルフ』(*Radio Golf*) を 2004 年に書き上げた後、2008 年にはオバマ氏が初のアフリカ系のアメリカ合衆国大統領に選ばれた。6 年後、2014 年 8 月、ミズーリ州ファーガソンで黒人青年マイケル・ブラウンが白人警官に射殺された衝撃的な映像と、大陪審の評決がその警官を無罪としたことから、全米各地で抗議の声が起こった。しかしながら、オバマ氏は合衆国大統領としては発言しても、黒人大統領として効果的な対策は取れず、「ニガー」という言葉を用いて不満をぶちまけるにとどまった。

こうした現状の中で、オバマ氏の登場以来、楽観視されがちであった差別解消という目標はどこまで達成されたのかという疑問に対して、今一度検証し、オーガスト・ウィルソンの作品『レイディオ・ゴルフ』の主人公ハーモンド・ウィルクスが、アフリカ系アメリカ人の伝統を守るため、政治家として上院議員まで出世するという野望を捨てる決断は、オバマ氏の政治的立場とどう違うのかを、作者自身の発言を交えて、彼の主張と価値観を検討し、その結果、オーガスト・ウィルソンが政治的な希望を直接語らず、白人社会との距離感を取りながら、アフリカ系の伝統に固執する理由を考察した。

③ ジェシー・フォーセットの『プラム・バン』とネラ・ラーセンの『パッシング』における ブラジル表象について

井上　正子

『プラム・バン』(1928)と『パッシング』(1929)。ネラ・ラーセンとジェシー・フォーセットの人種の偽装(パッシング)を扱う代表作には、なぜ「ブラジル」のイメージが溢れているのだろうか。デイヴィッド・ブラックモアは『パッシング』におけるブラジル表象をアイリーンの夫ブライアンのホモセクシュアリティおよびアメリカの人種差別からの逃避願望と関連づけながら論じたが、ブラックモアの批評は、ブラジルをアイリーンが固執するアメリカの物質文明の対極に置く作者ラーセンのプリミティヴィズムの踏襲として批判されている。一方、『プラム・バン』は、人種の偽装に疲れたアンジェラのブラジル青年アンソニー・クロスとの結婚というエンディングによって、ブラジルを人種のこだわりがないアフリカ系アメリカ人にとってのユートピアとして押し出していることから、実際には人種差別の存在するブラジルの現実を反映していないとの批判がある。これらの批評や批判の妥当性を、テキスト精読と文化史的背景を参照しながら検討することによって、本発表では、ラーセンとフォーセットにとって「ブラジル」というトポスが必然であったこと、そして両作品がハーレム・ルネサンスの文化史をアメリカという一国一言語の領域から解放したことを論じた。

報告

会員による出版

風呂本惇子監訳、柳樂有里・柴崎小百合・田中都・時里祐子・横田由理共訳(リディア・マリア・チャイルド著)『共和国のロマンス』(新水社、2016 年 3 月)、pp.480

留学報告

大和田　英子

2014 年 10 月から半年間、ボストンに滞在しました。ボストン大学に籍を置き、資料を読む日々でしたが、毎月のように学会に出かけ、研究発表を聞いたり、自分でもペーパーを読んだりしました。私は長い間フォークナー研究に専念しており、様々な角度から作品を分析していますが、やはり人種に関する視点は重要です。今回は、フォークナーの使った"Cathay"というひとつの単語を手掛かりに、アメリカ文学のいろいろな作品を縦断する(図書館での)旅をしてきました。研究がアメリカ南部に立ち戻ったところで時間切れとなり、日本でこのテーマを追い続けています。また、南部と奴隷制は切り離すことができないように、人間の歴史と奴隷制も切り離すことができません。そのため、ふたつ目のテーマとして現代奴隷制の問題にも取り組んでいます。

会員からの投稿

日本のラップ

川村　亜樹

2015 年はゼミ生の影響で日本のラップをよく聴いた。そのなかで、日本のヒップホップが、アメリカのヒップホップのように、ハーバード大学はじめ、大学で大々的に研究されているわけではなく、また、ジャンルとしてメインストリームの音楽シーンであまりお目にかかることもない一方で、単なるアメリカ文化の模倣の域を出て、ストリートに根ざしたリアリティを持った、実験性に富むアートとしてさらに進化してきていることが分かった。

日本のラップを草創期から牽引してきた、Zeebra の“Hate That Booty”や、Rhymester の“Deejay Deejay”などの近年のミュージックビデオを観ると、クラブシーンをめぐる、女の子たちがひしめくなかでのクールなワルさと、社会変革へ向けた政治的態度といった、ヒップホップの陰と陽の側面を引き続き見て取ることができる。その一方で、新たなアーティストとして、1990 年代にロサンゼルスに渡り、DJ、ビートメーカーとしてキャリアを積んできた BudaMunk は日本のヒップホップの新たな挑戦を感じさせる。アルバム *The Awaking* に収められた“Zen Garden”の映像では、実験的なビートとともに、和のテイストが前面に打ち出され、ヒップホップを起点としながら、そのジャンルに収まらないアートとなっている。

さらに、兄弟でラッパーの Punpee と 5lack は、メインストリームを意識しつつ異彩を放っている。オタク的な雰囲気で、ヒップホップのワルなイメージから逸脱する Punpee は、Rhymester と“Kids in the Park”に登場するなど、日本のラップ界で存在感を示しつつ、レッドブルのCMをラップで手掛けたことでも注目を集め、社会的に広く認知されつつある。また、5lack は政治的メッセージだけでなく、音楽性、ラップのスキルで勝負できるラッパーを目指しており、二人が参加するユニット PSG の「愛してます」のリリックは、高価な衣装に憧れるヒップホップの物質主義的側面に迎合しない。このように、彼らはアメリカのヒップホップをリスペクトしながらも、模倣の域に留まらないオリジナリティを生み出しつつある。

都築響一『ヒップホップの詩人たち』(2013)、巻紗葉『街のものがたり――新世代ラッパーたちの証言』(2013)などでも紹介されているように、続々と質の高いラッパーたちが日本で誕生している。依然としてヒップホップが世界的な若者文化の中心において一定の存在感を保ち、日本発のアーティストが世界レベルでの活躍の可能性を感じさせるいま、研究者として少しでも日本人ラッパーの存在を世界に発信していきたい。

沈む夕日:「黒」と「黄色」の敗北の共振——米アメリカ文学会　学会報告

牧野　理英

2016 年 2 月 25 日から 27 日まで開催されたテキサス州サンアントニオで行われた American Literature Association（米アメリカ文学会）のシンポジウムでの発表をここに報告する。シンポジウムのテーマが“Frontiers and Borders in American Literature”で、会場がサンアントニオということもあり、サンドラ・シスネロスといったメキシコ系やテキサス州出身の作家の作品を扱ったボーダー研究が多く発表されていた。また最近注目されている、コ—マック・マッカーシーに関する発表が多くあった。

日系と他のマイノリティーとのインターエスニックな関係に興味を持っている私は、この学会に単独で応募し、アジア系作家を扱う Marginal Literature というパネルで発表することになった。私の発表は、第二次世界大戦中、アメリカ南部における日系アメリカ人とアフリカ系アメリカ人との関係を南部文学に興味をもっていた日系アメリカ作家、ワカコ・ヤマウチの作品と絡めて論じたものである。

南部の日系アメリカ人（収容者と 442 部隊両方を含む）というと聞きなれないと思われるだろうが、実際に第二次世界大戦中、南部のアーカンソー州にジェロームやローワーといった日系収容所が設置されていた。また収容所から出て日系部隊に入るため訓練を受けている日系兵士の一部は、ミシシッピ—州のキャンプ・シェルビーというところで訓練を受けていた。しかし想像してみてもわかることだが、南部の日系アメリカ人という存在は 40 年代、ジム・クロウ法を大いに攪乱する要因とみなされていたようである。日系兵士は一応「白人」という共通認識になってはいたようだが、彼らは彼らで南部の黒人居住区を頻繁に訪れ交流し、公然とジム・クロウ法を乱していた。このことは黒人のマイノリティーとしての生き方に関して共振があったという事実を証明していることになろう。Matthew Briones の *Jim and Jap Crow: A Cultural History of 1940s Interracial America*（2012）によると、収容者でありのちに南部へわたり兵士となったジャーナリストのチャールズ・キクチは、40 年代リチャード・ライトの作品が日系の間で話題に上っていたことを手記に残している（74–5）。日系はアフリカ系を、エスニック・アイデンティティーを確立する上での「モデル・マイノリティー」とまでみなしていたのである。

第二次大戦中の「白」と「黒」のカラーラインを時に無視し、時に順守しているこの「黄色」の存在は、日系作家が南部文学の「黒」、「白」両方の立場に対してどのような観点をもっていたのかという問題を同時に想起させる。アリゾナ州ポストンで執筆活動をし、60 年代に作品を出版した日系アメリカ作家ワカコ・ヤマウチは、南部作家テネシー・ウィリアムズの戯曲に魅せられたと告白している。実際に短編 "And My Soul Shall Dance”「そして心は踊る」の中の収容者キヨコ・オカという人物を、日系少女の主人公の視点から、小柄で魅力的ではあるが、酒とたばこを常習し、「まるで皮膚が垂れ下がったようなだらしのない服を着、蜘蛛の巣のようなスカートをはいた」退廃的な女性として描いている。グロテスクな虫を想起させるその異様ないでたちは、夜の闇を舞う白い蛾のようだとテネシー・ウィリアムズが表した『欲望という列車』の南部ヒロイン、ブランチ・デュボアと通じるものがあるが、蜘蛛になぞらえたキヨコの中にブランチよりもわずかに強い生命力を描きこもうとした点が興味深いといえる。

そんなヤマウチはトルーマン・カポーティの熱烈なファンでもあった（“Songs My Mother Taught Me,” 4）。ヤマウチの興味はことに南部作家とゲイ作家であったようで、南部作家ではないが、黒人作家としてジェームズ・ボールドウィンの名前も上げている。しかしここで明ら

かに南部作家リチャード・ライトの存在を知っていながら、その名を挙げていないのはある意味興味深い。ライトのプロテスト文学が彼女のスタイルとは相入れないところがあったのだろうか？　全てが均等に分配され、日本の家父長的権威を失墜させるにいたる収容所の生活は、同時に新しい日系アメリカ人の男性性が生まれる母体ともなった。南部の退廃と、白人の男性性に対する反抗は、ヤマウチの男性登場人物の描かれ方にも垣間見ることができるが、それはライトの Bigger Thomas といった反逆児の生き方とは、異なったベクトルを指している。

そうは言っても、私としては俳句や和歌を使ったヤマウチとライトとの関係は敗北という基軸において共振を感じるのである。木内徹氏がライトの俳句に関して先駆的研究をされていることは周知のことである。そうした先行文献を踏まえ、ライトの俳句とヤマウチの和歌には何か連関するものがあるように思えてならない。

ヤマウチがライトのことを知っていたことは確かではあるが、ライトはおそらく彼女の作品は読んでいない。ヤマウチは創作活動を始めた 40 年代、そして 50 年代には出版がかなわず、60 年代になってやっと念願の戯曲の出版を果たしたからだ。そしてその作品のほとんどには和歌や短歌が織り交ぜられている。一方 46 年、勝利に酔いしれた第二次大戦直後のアメリカを後にし、忽然とフランスへ渡ったライトは死の寸前の 60 年代に俳句に興味を持ち始める。作風や主張の違う二人の作家との共通項は、この俳句や短歌といった日本文学に根差している。発表ではライトの有名な俳句“I am Nobody” とヤマウチの “Songs My Mother Taught Me” の中の短歌を扱い、沈む夕日のモチーフから南部文学と日本の敗北がどのような共振を与えているかを論じた。

アメリカ史における二つの敗北の歴史的瞬間（南北戦争における南部敗北、第二次大戦におけるアメリカによる日本の敗北）が重ねあって生まれる新しい自我――ヤマウチは “Songs My Mother Taught Me”において、南部の敗北のモチーフを日本の敗北に重ね、そこからアメリカでも日本でもない独特な男性性を創出している。それは常々日本回帰を描いたディアスポラ作家と認知されているヤマウチのいままでの位置付けとは違っている。そしてその感性は、同じ 60 年代に奴隷制という南部の負の遺産を、日本という敗北の国の文学的手法―俳句―によって新しく生まれ変わらせ、「沈む夕日」（日本）によって晴れて「無名」となった自身を高らかに歌い上げるライトの姿と重なるような気がしてならない。

発表では、ライトの俳句に関して知っていないアメリカの大学院生や研究者もおり、様々な質問が出、活発な意見交換ができた。アメリカ国内における敗北の感性は、主張の違う作家達のインターエスニシティを喚起させ、日本でもアメリカでもない独特な文学的空間を示していることを日本人研究者の立場からわずかながら報告できたと自負している。

入　会　者

古谷　やす子（ふるたに　やすこ）氏
所属：立命館大学（院）文学研究科　英語圏文化専修　後期課程
自己紹介：　子育てと仕事を終えたとき、好きだった学問の道が忘れられず 65 歳で立命館大学の聴講生になり、博士後期課程にまで進むことになりました。そのとき出会った Zora Neale Hurston の考え方に興味を覚え彼女の作品研究を始めました。大学時代には黒人について勉強したことがなく、コンテクストが理解できませんでしたが、研究を重ねるうち歴史や文化との関わりが理解できるようになってきました。この会に入会させて頂き、もっと深く考察できるよう努力するつもりですのでよろしくお願い致します。

会計からのお願い

① 2015 年度会費未納の方は至急下記口座までお振込みください。
　年会費：　6 千円
　振替番号：00910-6-148435
　名義人：　黒人研究の会
② 黒人研究の会ホーム・ページ(http://home.att.ne.jp/zeta/yorozuya/jbsa/)
　の「入会案内」からPayPalで会費を納入できます。ご利用ください。（但し、PayPalご利用の場合は、手数料300円が加算された6,300円が毎年自動振替となります。）

編集後記

第８１号も執筆者の方々のご協力をいただき無事編集を終えることができた。毎号編集しながら思うのだが、実に様々なことを学ぶ。例会発表者の先生がたが送ってきてくださった「発表要旨」を読み、例会時の様子を思い浮かべながら発表内容のエッセンスを確認する。「会員からの投稿」欄に寄せてくださった投稿文により先生がたの日々の経験や学会発表時の様子などを自分も追体験した気分になる。論文が出来上がるまでの周辺の出来事などを知ることも実に楽しい。会員の方々もこの会報を読み、同じ感想を持たれるのではないかと思いつつ、特に、学会発表されたとき、留学されたときには是非投稿をお願いしたい。

（井上　怜美）

＜編集＞　黒人研究の会・編集部
〒603－8577　京都市北区等持院北町 56-1
立命館大学文学部・坂下史子研究室気付

＜編集者＞　井上　怜美

ホーム・ページアドレス
http://home.att.ne.jp/zeta/yorozuya/jbsa/